

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）
「認知症のための縦断型連携パスを用いた医療と介護の連携に関する研究」
分担研究報告書

アルツハイマー病患者における通所サービス導入の成否に関連する要因の検討

研究分担者 矢田部 裕介（熊本県精神保健福祉センター）

○**研究要旨** 目的：認知症患者の円滑なデイサービス、デイケアなどの通所サービス（以下、デイ）導入の手法を探るため、これを促進・阻害する要因を調べた。方法：2011 年 1 月-12 月の期間に当院認知症外来を初診した高齢アルツハイマー病（AD）連続 157 例の診療録を調べ、主治医の通所促しによりデイが導入された群（N=19）と通所を拒否した群（11 名）を対象とした。二群間で患者背景、認知機能（ADAS-J cog）、精神症状（NPI）を比較した。結果：患者背景や MMSE、ADAS-J cog、NPI の各合計スコアは二群間で有意差を認めなかった。NPI 下位項目スコアの比較では、デイ拒否群において興奮が高い一方で不安が低かった。NPI 下位項目有症率の比較ではデイ拒否群の不安やアパシーの頻度が低かった。考察：AD 患者のデイ導入においては興奮の治療が重要である。また、不安やアパシーがみられる患者では、スムーズなデイ導入が期待される。

A . 研究目的

アルツハイマー病（Alzheimer's disease: AD）をはじめとする多くの認知症で根治的な治療法は確立されておらず、認知症患者においては対応や関わり、見守りなどのケアが重要である。介護保険制度下のわが国では、在宅認知症患者の専門的ケアは主としてデイサービスやデイケアなどの通所サービス（以下、デイ）によって提供される。認知症医療においてデイ利用の促しは、医療介護連携の最初の入口であり、デイ導入の成否はその後の患者や介護者の生活の質（quality of life: QOL）へ大きく影響する。活動性の低下した患者がデイへの通所を拒否した場合、廃用性に認知機能が進行する懸念が生じ、妄想や攻撃性が家族へ向く患者では、家族の介護負担を軽減するためにもデイ利用は不可欠である。しかし、様々な理由からデイを拒否する認知症高齢者は多い。男性、若年者、高学歴、知的職業、認知機能障害が軽い、興奮や易怒性を有するなどの要因がデイを拒否する患者像として考えられているが、デイ導入の成否と関連する要因を系統的に検討した調査はない。

そこで今回、デイ導入を通じた円滑な医療介護連携の手法を探るため、デイ導入の成否に関連する患者要因を調べた。

B . 研究方法

2011 年 1 月から 12 月の期間に熊本大学医学部附属病院認知症外来を初診した高齢発症 probable AD（NINCDS-ADRD）の連続例（N = 157）を抽出した。全例の診療録を後方視的に精査し、初診時には通所サービスを利用しておらず、初診後の評価を経て主治医からデイ導入を促された患者（N = 53）の中から、転医などの理由により経過を確認できなかった患者（N = 13）、家族の判断で介護保険申請を見合わせたなど、明らかに家族側の要因でデイ導入がなされなかった患者（N = 9）、入院した患者（N = 1）を除外した 30 名が本研究の対象である。対象 30 名を主治医の促しから 3 ヶ月以内にデイ導入がなされたデイ導入群（N = 19）と通所を拒否したデイ拒否群（N = 11）の二群に分け、性別、年齢、教育年数、職歴、罹病期間、認知機能障害、精神症状・行動障

害 (behavioral and psychological symptoms of dementia: BPSD)、介護負担度について比較を行った。認知機能の評価には Mini Mental State Examination (MMSE) ならびに Alzheimer's Disease Assessment scale-cognitive subscale 日本語版 (ADAS-J cog) を用いた。BPSD の評価には Neuropsychiatric Inventory (NPI)、介護負担度の評価には Zarit caregiver burden interview (ZBI) を用いた。解析は二群間の年齢、教育年数、罹病期間、MMSE スコア、ADAS-J cog スコア、NPI 合計スコアの比較には student-t 検定を用い、NPI 下位項目スコアの比較には Mann-Whitney U 検定を用いた。二群間の性別、NPI 下位項目有症率の比較には Fisher の正確確率検定を行った。職歴については厚生労働省編職業分類に基づき、二群間における各職種の頻度を Fisher の正確確率検定を用いて比較した。すべての検定は Windows 版 SPSS version 17.0.にて行い、統計学的有意水準は 0.05 (両側) とした。(倫理的配慮) 本研究は熊本大学倫理委員会の承認を得た「熊本大学における認知症の縦断的症候学的研究」の一環として実施した。また、すべての患者もしくは家族から研究参加への同意を書面で得た。

C. 研究結果

デイ導入群とデイ拒否群との間で、性別、年齢、教育年数、罹病期間といった患者背景に有意差は認めなかった。職歴の比較においても、管理的職業や専門的・技術的職業等の知的職業の割合がデイ拒否群に多いというわけではなく、無職(主婦)であった患者も含めて二群間で職種の偏りはみられなかった。MMSE スコアや ADAS-J cog スコア、NPI 合計スコア、ZBI スコアのいずれの評価項目においても、二群間で有意差は認めなかった。NPI 下位項目スコアの比較では、デイ導入群においてデイ拒否群と比べて有意に興奮が低く (0.389 vs 1.500, $P = 0.048$)、不安が有意に高かった ($P = 0.047$)。NPI 下位項目の有症率を比較すると、デイ導入群において有意に不安が高く

(41.2% vs 9.1%, $P = 0.042$)、アパシー (82.4% vs 63.6%, $P = 0.062$) が高い傾向がみられた。

D. 考察

本研究の結果から、予想に反して男性や若年、高学歴、知的職業の就労歴などの個人背景は、デイ導入を困難とする要因ではないことが明らかになった。一方で、特定の BPSD パターンがデイ導入の成否を規定する可能性が示唆された。症候の重症度を反映する NPI スコアにおいては、デイ導入群において有意に興奮スコアが低く、不安スコアが高かった。このことは興奮が軽く、不安が強い場合にデイ導入しやすいことを示唆する。一方で、有症率でみた場合には、興奮の頻度に有意差はなくなり、不安とアパシーがデイ導入群で高頻度であった。これらの NPI の結果を総合的に解釈すると、興奮はその有無よりも程度の強さがデイ導入を阻害し、不安は有無ならびに程度の強さがデイ導入を促進する、さらに、アパシーは程度に関係なくその有無がデイ導入の成否をわけることが示唆された。研究限界としては、第一に、本研究は小規模サンプルサイズであり、統計学的評価の正確性が十分ではない可能性がある。第二に、本研究は後方視的研究デザインであり、結果の妥当性を証明するには前方視的な検討が必要になると考えられる。第三に、いくつかの限られた指標を二群間で比較したが、デイ導入の成否に深く関わると考えられる病前性格やケアマネジャーの熟練度についての比較がなされていない。これらの限界を踏まえても、デイ導入の成否に関連する要因を示唆した本研究の結果は医療介護連携の観点からも非常に有用と考えられる。より良質な医療介護連携のために、さらなる検討が望まれる。

E. 結論

デイ導入にあたっては、患者背景から先入観を持たず、BPSD パターンに注目して導入を行なうことでスムーズになし得る可能性が示唆された。

F . 健康危険情報

なし

G . 研究発表

1.論文発表

Hasegawa N, Hashimoto M, Koyama A, Ishikawa T, Yatabe Y, Honda K, Yuuki S, Araki K, Ikeda M. Patient-related factors associated with depressive state in caregivers of patients with dementia at home. Journal of American Medical Directors Association 15:371.e15-18

藤瀬 昇, 矢田部裕介, 池田 学 . コタール症候群と認知症の抑うつ . Dementia Japan 28 : 245-251, 2014

2.学会発表

Fukuhara R, Tanaka H, Hatada Y, Ishikawa T, Yatabe Y, Yuki S, Shiraishi S, Hirai T, Hashimoto M, Ikeda M. Neural correlates of abnormal eating behaviors in semantic dementia –a preliminarily semi-quantitative analysis-. 9th International Conference on Frontotemporal Dementias, Vancouver, Canada, October 23-26, 2014

川上遥平, 石川智久, 遊亀誠二, 矢田部裕介, 橋本 衛, 池田 学 . 遺伝性脳小血管病から高次脳機能障害をきたした1例 . 第 67 回九州精神神経学会, 北九州, 12月 4-5 日, 2014

田中 響, 橋本 衛, 福原竜治, 石川智久, 矢田部裕介, 遊亀誠二, 松崎志保, 露口敦子, 畑田裕, 池田 学 . SMQ を用いた軽度アルツハイマー病患者の生活障害の検討 ; 軽度血管性認知症患者との差異も含めて . 第 29 回日本老年精神医学会, 東京, 6月 12-13 日, 2014 .

H . 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし